

## 土谷紘加 + 笠松彩葉（アトリエコーナス）

### 「つくることの日常」にふれる

—今日は出展作家の土谷紘加さんと、土谷さんの活動の場であるアトリエコーナスの笠松彩葉さんをお迎えしました。まずは自己紹介をお願いしますか。

笠松：土谷紘加さんは2015年春に特別支援学校を卒業後、アトリエコーナスを利用なさっていて、もうすぐ10年になります。私は同じ2015年の秋にスタッフとして働き始めました。ですから紘加さんの後輩ですね。支援員としてメンバーの日常をサポートしつつ、アート担当としてメンバーの作品管理やアート活動のサポートをしています。

アトリエコーナスは特定非営利活動法人コーナスが運営する生活介護施設で、1993年に知的障害者のお母さんたちによって設立されました。大阪の阿倍野区、「あべのハルカス」がすぐ見える場所で、現在は紘加さんをはじめ14名が利用されています。年齢層は25～55歳で、地域の方が中心です。活動は平日10時から16時までで、午前中の約2時間はアート活動、他の時間は近隣の清掃活動や、コーナスで作っているクッキーの袋詰め、ダンスや外出などの余暇活動をして過ごしています。

—私が伺った際は、アットホームな雰囲気が印象的でした。作家さんごとにお部屋が区切られているけれど、隣で話していることに別の部屋から返事が聞こえたり、歌声が聞こえてきたり、皆さんが仲良しな感じで素敵だと感じました。

土谷：はい。仲良しです。

笠松：そうですね。日常をいかに楽しくすごせるかに重きを置き、どこに行きたいか、何をしたいかも一緒に話します。メンバーが出展する展覧会にはできるだけ一緒に行くことも大切にしています。

## ビーズから生まれるコミュニケーション

—土谷さんの「COLORNY（カラニー）」と呼ばれる作品は、5ミリ程の筒状のプラスチックビーズ（アイロンビーズ）を、凸のついたプレートに並べて模様をつくり、アイロンの熱で溶かして圧着させるものです。いまご本人が手にしているのは新作ですか？

土谷：今日できた。これは黄色とオレンジとブルー。

——これはより小さな2.6ミリビーズを使った「micro colorny（マイクロカラニー）」ですね。所々にちりばめた青いビーズは、何をイメージしているのでしょうか？

土谷：バニラ、みかん……。

笠松：紘加さんはよく、自分の作品をフレーバーというか、味のイメージで教えてください。これは先週並べておいたビーズを使い、先ほどアイロンでつくっていました。ふだんは、完成するとその日の午後はそれを持ち歩き、アトリエ内の人たちに見せたりしながら過ごしています。

—作品そのものがコミュニケーションツールなのですね。

笠松：先ほどのような味や形のことを話し、そこから紘加さんの好きなことの話につながることもあります。例えばバニラなら、今日はアイスを食べにお出かけするのですよねとか。そうして作品を見せることが、会話のきっかけになるようです。なお、色が多く混ざっている作品ほど、フレーバーも増えるようです。この作品だと……。

土谷：ストロベリー、チョコ、これはピンク。

笠松：単色の作品では大抵その色に対応した味があり、色数を使ったものは上から順にフレーバーを教えてください、本人の目に止まった色のフレーバーの話になったりと、さまざまですね。

—土谷さんは、どのフレーバーが一番好きですか？

土谷：バニラ。ここ。こっちこっち。

笠松：たしかに、最もよく名前が出るのはバニラですね。対応する色の幅も、クリーム色、水色、白など広く、やはり一番好きなのかなという気がします。

## 14 平方センチメートルの宇宙

—笠松さんがアトリエで働き始めた2015年、土谷さんはもうアイロンビーズ作品をつくっていたのですか。

笠松：はい。私が働き出した時には今の制作スタイルでした。1人でビーズを並べ、アイロンも使っていたので、もう何年も制作されている方なのかな？と思ったぐらいです。その他、ダンスや散歩などの活動にもアクティブに参加されていました。

—初期の作品から、ビーズのパーツを一部溶かしきらない表現や、アイロンの当て方でうねるような表現をしているものがあり、すごいなと思います。

笠松：アトリエコーナスにこられる方々には、まずはどんなこと興味があるのか、画材をいろいろ試し、保護者の方や学校の先生に話を聞くなどします。紘加さんはアイロンビーズが好きだと聞いてまず始めてみたのが、小さな四角や丸の作品でした。今回の出展作群の1/4ほどの小さなもので、やがて今の14×14センチほどのサイズになっていきました。また、ビーズとアイロンが熱でくっつくのを防ぐために間に挟むアイロンシートとして、クッキングシート、専用のプラシート、リサイクル可能なクッキングマットの3種を使っています。どれを選ぶかで表面の質感がマットな感じ、ツルツル、デコボコと、それぞれ異なる特徴もあると思います。

気持ちの面での変化で言うと、月曜から金曜まで毎日1枚作り続けるうちに、慣れてきてペースが上がり、午前10時から12時だった制作時間も増え、2019年ごろは1日7枚もつくるようなことがありました。もちろん大好きで楽しく取り組んでいる

と思う反面、午後から別のプログラムがあるときなど「もっとやりたかったのに」という感じで紘加さんがイライラしてしまうことも起きました。加えて材料費予算などの事情もあり、2020年くらいに一度、制作のありかたを見直したのです。制作時間は当初のものに戻し、休憩もしっかり取り、午後に別のプログラムがある日は「今日はここまででビーズは片付けますね」というふうにしてもらいました。

そこからビーズ以外の活動時間も増え、他にも楽しいことをしたいよねという話になりました。近年はコロナ禍でできなかったことも多いので、どう楽しく過ごすかを一緒に考えるなかで、人との関わりが増えたようにも思います。いまは主に夕方「作品発表」をしていて、好きなスタッフに作品を見せる時間も増えたと感じます。もともと紘加さんは自分の作品がすごく好きで、持ち歩いて過ごすなどしていたのが、より積極的に人に見せることも増えたと思います。

土谷：思います。はい。

笠松：ビーズの購入も、紘加さんと一緒に行くことを始めました。2019年ごろまでは、ビーズを箱にパンパンに詰めた状態で、毎日そこから好きな色を選び、とにかく作り続けていました。そのため当時はスタッフが全色をまんべんなく注文していましたが、今は紘加さんとネットショップの画面を見ながら、本人がほしい色を選んで注文しています。今回の新作は黄色とブルーとオレンジが入っていて、これも紘加さんが選んだものです。

—さわやかな色合いですね。季節なども関係するのでしょうか。

笠松：秋に入ると渋い色や濃い色が増え、紫の割合が増えますし、夏はピンクなどの淡い色が増えるようです。紘加さんのなかのブーム以外に、季節感などでも変わるのかなと思います。

### 日々の心象を写す、日記のような作品

—笠松さんは、土谷さんの作品を「日記のよう」ともおっしゃっていました。この展覧会は「日常」がテーマなので、出展作品も土谷さんに選んでいただいた経緯が

あります。2500 点を超えられる膨大な作品から、3 日間かけてご自身に選んでいただいたことは、本当にありがたいことでした。

笠松： 紘加さんの作品は制作年代別に段ボール箱に保管しています。ひと箱ごとに 30 から 100 点ほどの作品が入っており、今回は各箱から 1 つずつ選んでもらいました。そうすると年代ごとになり、かつ選ぶときの彼女の気分も反映されて面白いのではと思ったのです。私はふだんから作品管理や出展準備などでメンバーの過去作品を見ることもあります。一方で、紘加さんはこれまで自作群をまとめて見ることはなかったので、部屋一杯のビーズ作品を前に「わあっ」と言いながら選んでくれました。1 枚 1 枚じっくり選び、かなり迷うこともありました。

選出作業は去年の冬で、紘加さんは着ていた紅色のダウンジャケットの生地の上に作品を当てたりしながら選んでいました。今回の出展作に赤みが多いのは、それを選ぶ基準にしていたのかなとも感じます。たとえば今日は白い服に水色とかレモン色が入っているので、もしいま選んだらそうした色が増えるのかもしれない。そう考えると、アトリエでも彼女に定期的に作品を選んでもらい、展示すると面白のかなと思いました。

— 四角や丸のフォルムの作品のなかに、ハート型のものもありますね。

笠松： カラフルなもの可愛いものが本当に好きで、ヘアゴムもいつもキラキラの可愛いものを身につけ、よく見せてくれます。あるときまで四角い作品が中心でしたが、丸や六角形、小さいものだと靴や動物の形に切り抜いたようなものもあります。その後、これもあるよ！という感じでハート型が出てきて、それがグッと増えました。

— 年代ごとに並べたこともあり、多彩な表情の作品をご紹介できました。熱による凹凸の変化が見られる作品や、ビーズを山のようにこんもりまとめた状態で熱を加えた、2018 年の作品群があります。

笠松： 通常はアイロンビーズをプレートに等間隔で並べてつくりますが、2018 年の作品群はビーズを袋ごと、またはタッパーごとプレート上に山盛りに乗せ、アイロンシートの上からアイロンで押さえつけ、力業でつくったものだと思います。

—新作群も作っていただきましたね。これらは「1週間」を表しているようで、やはりピンクのハートから始まり……

土谷：月、火、水、木、金。

笠松：これも毎日何点かつくったものから、紘加さんに選んでいただきました。

### 幾重にも重なる「日常」にふれる

—今回さらに、土谷さんに「さわれる作品」もお願いし、5点出していただきました。ここでは先ほどお話した、ビーズを山盛りにした作品にも久々に取り組んでいただきました。これについては何か心理的な変化もあったのでしょうか。

笠松：やはり日々の気持ちの変化は作品にも関係すると思うので、紘加さんとしても、久しぶりにやってみようかなとか、あるいはもうこの色は使い切っちゃおう！といったことはあったのかもしれませんが。気持ちのお話で言うと、一緒にいて、嬉しい、悲しい、怒っている、といった気持ちをはっきり感じ取れる部分もありますが、作品を前に「この日は楽しかったのかな、それとも怒っていたのかな」というように見てもらうことも面白いかもしれませんね。

土谷：怒ってないよ（笑）。

笠松：紘加さんの作品は色の種類を問わずさまざまですが、今回その中から選んでくださいとお願いすると、シンプルな1色や2色でつくったものや、形も綺麗なものを選ぶことが多かったと感じます。紫や緑、グレーもあり、展示室1に飾ってもらった様子を見ると本当にカラフルなのがわかりますが、側で見ていると、特に青や赤、ピンク、水色のようなビビッドな色は好きなのではと思いました。

—たしかに単色使いのものも多いですね。

土谷：（マイクロカラニーの作品を指して）こっちはバニラと紫とグレー。ごまプリ

ン。

笠松：グレーはごまプリンですね。青がバニラで、これはアイスの「スーパーカップ」のラベルが青だからだと思います。

—なるほど！ なお紘加さんが選んでくれた年代別の作品群の隣には、2017年に制作された作品群から一部を時系列で並べて展示しています。両者を比べて見ていただくことでも、土谷さんという作家について理解が深まるのではと考えています。

笠松：一方は紘加さんが日々作り続けている様子が伝わるもの、もう一方はそのなかでも特にこれ、ということで選ばれたものなので、私も面白いと感じました。

—さわれる作品は展示室2にあります。こちらもハート型のものや、マイクロカラニーの作品、厚めのビーズを少し変形させたものなどがあり、それぞれの違いを直にふれて楽しんでいただけたらと思います。

笠松：私も今回の展覧会で、紘加さんの作品が彼女の日常と地続きというか、本当にすぐ隣にあるものだと改めて感じました。彼女の日常のなかに溶け込んでいるアート活動から、新たに生まれてくるものを楽しみにしています。また、今回「さわれる作品」という形でも発表したことに関連して、紘加さんにとっては、自作をさわれることも日常のなかに確かにある営みではと思いました。来場者の皆さんが、紘加さんもこうして作品にふれているのかなと想像し、そこにある日常を感じてもらえたらと思います。

—ありがとうございます。皆さん、遊びにきてください！

土谷：ぜひ、遊びに来てください！